

## コロナ禍中のキャンパス便り

田島 真理恵 (たじま まりえ)

MA Development Studies '20年入学

初めまして。田島と申します。皆様と新しく繋がる機会になると思い、寄稿させていただきます。本稿ではコロナ禍の留学生活について記載いたしますので、ご覧いただけましたら幸いです。

### 留学の背景

サセックス大学入学前、証券会社の東京本社や香港オフィスにて、海外ビジネスの企画・立案に従事していました。ミャンマーでの証券取引所の立ち上げや中国での合弁会社設立などダイナミックでやりがいのある案件に関わることができ、また、業務外には東日本大震災後に宮城県にできた農業スタートアップで、海外マーケティングのお手伝いもさせていただくなど、非常に楽しい社会人生活を送っていました。しかしビジネスの力は確かに雇用創出や経済開発に寄与できる一方で、難民やスラムの最貧困層など、最も脆弱性の高い方々にはなかなか届きません。そんなジレンマがあり、ビジネスと社会の架け橋となる方法を模索するため、大学院への入学を決めました。

### 学び

早いもので授業は残すところ2週間となりました。コロナ禍のためIDSの全ての授業はオンラインで行われていますが、実務とアカデミアを行き来し第一線で活躍される教授陣に、多様なバックグラウンドと開発への燃え滾るような情熱を持つ同級生にと、恵まれた環境で学んでいることに感謝する日々です。春学期は支援とビジネスという対極の二つの視点を学べたらと、

「Aid and Poverty」と「Business as a Development Actor」という授業などを受講しています。開発・経済理論をベースに、「フィランソロキャピタリストの是非」や「金融包摂の効果と限界」などの開発の根源的な問いについて、多様な知識や経験を持つ同級生らとディスカッションする時間はとても刺激的です。現在、修士論文のアウトラインを作り始めていますが、まだチャレンジが多いと思われる「脆弱性・紛争・暴力の影響国におけるプライベートセクター」に焦点を当て、執筆したいと考えています。

### 留学生活

イギリス全土で厳しいロックダウンが課され、ブライトンのパブもカフェもほとんど堪能できていません。自国から授業を受ける学生も少なくなく、留学の醍醐

味の一つである学内外のネットワーキングは例年よりも難しい状況です。それでもブライトンにいる友人とはキャンパス裏や海辺を散歩したり、フラットメイトとは各国の料理の持ち寄りパーティーをしたりなど、友人に恵まれとても楽しい毎日を送っています。スイーツの話で盛り上がっていたかと思えば、次の瞬間には「empowermentとは何か」や「難民支援のあり方」を熱く議論していたり、授業に関連した映画の上映会をしたりなど、社会課題に対する意識がとて高く、また言葉の使い方に敏感で多様性に寛容な友人らと、刺激的な時間を過ごせています。



(フラットメイトの誕生日会にて)

また学外では、入学当初には移民・難民向けのフードバンクのお手伝いをさせていただいていましたが、こちらもロックダウンにより難しくなっていました。その代わりに、世界各地で人道・開発分野でご活躍される方にキャリアのお話を伺ったり、関心分野の専門家に登壇いただき自主的に勉強会を開催したりするなど、オンラインの普及により良かったこともあります。こうして様々な方に学びの機会をいただいていることに感謝するばかりで、いずれは私も後輩へお返しできるよう、努力して参ります。

### 今後

今後の進路はまだ決まっていませんが、「開発とは何か」「あなたのpositionalityは何か」と常に問われ続けたおかげで、入学当初から模索し続けてきたビジネスと開発の交差点が少しずつ見えてきました。まだチャレンジングなことも多く遠い道のりなので、研究も就職活動も一生懸命努力したいと思っています。これからも、サセックス大学を通じて出会えた皆さまから学ばせていただく機会を楽しみにしております。

何かございましたらお気軽なくご連絡ください！  
mtajimari0117@gmail.com

## ALUMNI NOW!

浅野 麻里 (あさの まり)

MSc in Science and Technology Policy  
Science Policy Research Unit '2017 年修了

コロンビア ロス・アンデス大学 日本文化・経済・  
学術センター コーディネーター

「自分の職歴を活かしてもっと世界で働きたい」「社会貢献や持続可能な開発に向けてアクションを起こしたい」—そんな想いから、3年半勤めたIT企業の営業・マーケティングを退職し、2016年に留学へ。当時は、その後の自分にどんな人生が待っているか想像つきませんでしたでしたが、勇気を出して飛び出したのを覚えています。

その年、私の専攻、科学技術政策では半分くらいが社会人経験のある学生であったため、国籍だけではなく、さまざまな分野での就労経験のある方々と接することができ、非常に刺激的でした。しかし、当時は読み物をこなすこと、皆の英語を聞き取ることで精一杯。特に1学期は、質問もしたいが何がわからないのかもわからない、という状況で、悔しい思いをたくさんしました。そんな私が、TOEFLをスラスラ出来るようになったり、世界で英語やスペイン語を使って仕事が出来るようになるとは、夢にも思いませんでした。

あれから3年以上が経過し、私はいま南米コロンビアの日本文化・経済・学術センター（通称：日本センター）でコーディネーターとして働いています。大学院時代に多くのラテン系の友達ができ、英語以外にもスペイン語という世界第3位の母国人口のある言語に魅了され、卒業後は、スペイン語を勉強しながらスペイン語圏で就職活動をしました。最初に見つけた仕事は、コロンビアの非正規雇用の家事労働者を正規雇用するサポートする社会起業スタートアップでした。自分の職歴を活かして、コロンビアの低所得労働者の方々にセーフティネットを与えることをとてもやりがいに感じていました。

そのあと、日本センターでの仕事が舞い込んできました。最初はプロジェクトマネージャというポジションで、すでに確定したプロジェクトの管理が私の仕事でしたが、2020年からはコーディネーターというひとつ上のポジションで、企画から主体的に行なうことが出来るようになりました。日本センターは、文化・経済・学術の面で日本とコロンビアの架け橋になることを目指し、2018年12月に設立しました。開始から2年少々ですが、着実にコロンビアでのプレゼンスを発揮しています。両国の政府系機関、日系人協会、商工会議所など、様々な機関との連携も進んで、少しずつ大きなプロジェクト立案をさせていただく機会も増えてきました。

何よりも個人的に嬉しく思っているのは、大学院留学から目指していた「産学官連携」のコーディネーションに自分が当事者として携わることができ、実際に、

多様な機関との連携が進んできていること。そして、今となっては英語だけでなく、大半の業務でスペイン語を使って仕事ができることです。スペイン語を始めた頃は、覚える量が膨大で「たとえ10年経っても出来るようにならないかもしれない」と思ったことがありますが、辛抱して勉強を続けた結果、1年を過ぎた頃からだいぶ自信を持ってスペイン語を使えるようになりました。

3年前に大学院を卒業したときは、次の就職はどうか、このままでいいのかと悩んでいました。しかし、いま振り返ってみると、とにかく自分を信じて突き進むということの大切さを実感します。周りとは比べるのではなく、自分と向き合ってそのときにできることを着実にやっていけば、いつか必ず目指していた道は開ける—そう当時の私には言ってあげたいです。

ラテンアメリカでの生活からは、人生における大事なレッスンも学びました。それは「おおらかに今を楽しむこと」そして「家族や友達などのプライベートな時間を大事にすること」。日本で働いていた頃は、どうしても仕事優先、プライベートな時間が取れなくても「仕事だからしょうがない」と思っていました。いつかは自分のための楽しむ時間を取ろうと思っても、なかなかそのいつかはやってこず、時間ばかりが過ぎてしまっていました。

コロンビアでの生活が、そんな私にちがった影響を与えました。一般的にラテンアメリカの人たちは、家族との時間が最重要と考えています。コロンビア人を見ると、どんなに忙しくても何がなんでも仕事は定時で完了させる、終わらなくても次の週に調整するなどして、自分のプライベートな時間を確保します。そのような様子を見ていて、私も働き詰めるのではなく、出来る限り自分のための時間を確保するようになりました。不思議なことに、自分の時間を大切にすると休むときは休むために、むしろ仕事の生産性・効率性が上がって、スムーズに仕事出来るようになりました。

サセックス大学大学院での生活は、当時は悔し涙するほど大変だった覚えがありますが、いまその時のことを思い出すと、すべてがかけがえのない時間であったと感じます。あの時の努力が糧になって、新たな人生を切り開くことができ、本当によかったと思います。



## ALUMNI NOW!

飯塚倫子（いづかみちこ）

MPhil in Development Studies, Institute of Development Studies (IDS) 1993年修了

DPhil in Science, Technology and Innovation Policy, Science Policy Research Unit (SPRU) 2007年修了  
政策研究大学院大学 教授（科学技術イノベーション政策プログラム）UNU-MERIT Affiliated Fellow, SPRU Associate Fellow

月日の経つのは早いものです。初めてサセックス大学を訪れた頃から今年でちょうど30年です。

大学卒業後すぐにIDSの修士課程に入った私は、実務経験のある多彩な同級生に圧倒されっぱなしの学生生活を過ごしました。修了後は、実務経験がない、日本のODA政策についてさえもよく知らない、という反省から、まずは日本のODA政策に関わる仕事がしたいと思い、財団法人国際開発センター（IDCJ）で研究員になります。ここでの仕事は関係省庁のODA案件形成のための調査報告書の作成でした。IDCJでは、社会人として必要なことを教えていただきました。

IDCJでの勤務3年後、国際連合競争試験に合格し、さまざまな方のご尽力を得て、国連ラテンアメリカカリブ経済委員会(ECLAC：在チリ、サンチャゴ)へ赴任します。ECLACは従属理論（カールドーソ）や構造主義の観点から交易条件悪化（プレビッシュ\*）という独自の議論を展開し、ラテンアメリカ諸国に輸入代替工業化政策の必要性を唱えたことで有名です。私がいた90年代のラテンアメリカは、アジア新興国に経済成長で遅れをとった「失われた10年」の反省から新自由主義へ政策を振り戻していた頃でしたので、ECLACの立ち位置はなかなか政治的に微妙でした。しかしながら、開発学で歴史的に重要な議論を繰り広げた、学術的な雰囲気強く持つ機関で仕事をさせていただいたことは、良い勉強になりました。この後、一旦IDCJに戻りましたが、専門性を身につけたいと、博士課程進学のため再度サセックスに向かいます。最初の訪問からほぼ10年後でした。

SPRUに巡り会ったのは、IDSで修士論文の指導をしてくださったRaphie Kaplinsky教授のおかげです。進学相談をした際、「開発援助」という枠で問題を狭く捉えていた私に、「科学技術イノベーション（STI）政策」という分野から途上国を分析している、SPRUという研究ユニットがあると紹介して下さったからです。その頃、SPRUの博士課程には、STI政策を学び、キャッチアップを目指すアジア、ラテンアメリカの国々から多くの留学生が在籍し、彼らと新しい理論体系を学ぶ、充実した博士課程をすごしました。その頃築いたネットワークは今でも仕事に生かされています。

博士課程後はUNU—MERIT（国連大学マーストリヒ

ト技術革新・経済社会研究所\*\*）に研究員として職を得ました。途上国のSTI政策の仕事ができる国連機関は皆無だったので、本当に運が良かったです。マーストリヒトはオランダの最南端にある人口10万人都市で、EUを形成したマーストリヒト条約が締結されたことで有名です。この小さい都市の研究所で唯一の日本人として10年間、ヨーロッパ、アフリカ、アジア、ラテンアメリカ、北米出身の研究員と共に研究、行政官研修、修士・博士課程の学生指導を行いました。特に印象深いのは、途上国の行政官を対象とした、STI政策の短期研修プログラム\*\*\*です。担当者として、要請をうけた国のSTI政策の実情を調べ、相手国担当者と相談し、必要とされるコースの科目と講師の選択、デザインをし、全部で18回、15カ国にて開催しました。好評を得、最後の数年間は、中南米地域は米州開発銀行と、アフリカ地域はアフリカ連合と共催する運びとなりました。研修を行う立場でありながら、各機関の担当官、招聘された講師、参加者である途上国政策担当者から、逆に多くことを学び、それが今の政策研究につながっていると思っています。

2018年から、15年ぶりに日本に帰国し現在の職場におります。前に日本で勤務した際は「開発援助」の看板で働いていましたが、今度は「科学技術イノベーション」です。同僚の先生方との議論には宇宙政策、大学評価、STI基本計画と、今まであまり関わっていなかった分野もあるため、日々、新しいことを学んでいます。また、前職では「外人」であったため機会がなかった政府の政策研究会に参加する機会をいただけるようになり、異なる形で研究成果を発信する重要性を強く感じるようになりました。

最近援助の分野でSTIの役割が認識され始め、また、STI政策の分野では、G20の台頭、科学技術外交、インテグリティ、国境を越えるSTI（例えば、ICT）の標準化やガイドライン（宇宙や海洋資源利用）合意といった視点から途上国との連携の重要性は増えています。これら2分野を繋ぐという自分の研究活動の意義を今になってやっと実感できるようになりました。

現在、2019年に始めた「破壊的」「包摂的」イノベーションというプロジェクトの取りまとめ（書籍化）を行っています。途上国を対象とした社会課題に挑戦するSTIで先駆的な活動をしている個人、企業、団体の経験を取りまとめ、理論的な観点から一般化し、



パンデミック後、SDGsの描く「ありたい未来」に近づくための政策や政策ツールを考える際の材料の一つにできれば、と思っています。

写真は2018-19年、米州開発銀行のプロジェクトで博士課程時代の友人と仕事をする機会を得ました。プロジェクト・

ミーティングのために訪問したアルゼンチン、ブエノスアイレスでThe Brightonというバブを発見しその前で撮影。

\*交易条件の議論は「プレビッシュ=シンガー命題」とも言われています。シンガーはIDSのハンス・シンガー教授です。

\*\*国連大学本部は東京にありますが、分野ごとの研究所が全世界に10存在しています。例えば、開発経済分野ではUNU-WIDER。

\*\*\*DEIP:(Design and Evaluation of Innovation Policy)プログラム。

## サセックス大学 開発学ウィークに参加して

いつもならば桜の便りが聞こえ始める頃、サセックス大学で日本を含む極東の地域を担当しているJames Minhas から英国大学留学フェアのボランティア募集の声が掛かる3月初め、今年はコロナ禍で移動ができないので、Webベースの「開発学ウィーク (Development Studies Week)」を3月22日~26日に開催するのでそれに参加できる人を探して欲しいとの連絡が来ました。サセックス大学は5年連続開発学で世界1位にランクされているが、開発のコースをオファーする4つの学部 (School of Media, Arts and Humanities; University of Sussex Business School – Development Economics MA, Science Policy Research Unit (SPRU) ; School of Global Studies; Centre for International Education) とInstitute of Development Studies (IDS) がこのイベントを共催。それぞれ、サンプル講義、コース概要、卒業生のプレゼン、そしてQ&Aからなるセッションを企画しました。日本同窓会からは、川口まみさんがInternational Education and Development のセッション、高瀬千賀子がDevelopment Economicsのセッションに参加し、またフランス在住の深作裕喜子さんがSPRUのセッションに参加して下さいました。私が参加したDevelopment Economics のセッションでは、卒業したばかりでインドのAshoka大学でTeaching Fellowをしている Ms.Namrata Nairと卒業後3~4年でナイジェリアの中央銀行でAssistant EconomistをしているMs. Hassana Babangidaが同窓生として参加しました。また、Dr. Julie Litchfieldがコースの概要を説明しましたが、現在なお活気のあるコースの様でとても嬉しく思いました。それぞれの学部はインスタグラムのライブセッションも行いました。開発学ウィークの様子はサセックス大学のHPから見ることができます。

(<https://www.sussex.ac.uk/study/international-students/development-studies-week-2021>)

(高瀬千賀子、Development Economics 1982年卒)

## 旧友の来訪

コロナ禍の日本に、New School大学のFukuda-Parr Sakiko教授が来訪されました。福田パー先生は、サセックス大学のMA Development Economicsを1974年卒業の同窓生です。先生とは、2000年頃、国連開発計画 (UNDP) で隣同士の部屋で勤務して以来の友人です。当時、先生は人間開発報告事務所の所長で、私は南南協力部のシニアアドバイザーとして働いていました。

「人間開発報告」は、UNDPの最大の商品価値を持った出版物で、年々世界の注目を集めるようになっていました。Directorの仕事は真に重責のポストでしたが、持ち前のユーモアで多くの会議を取り仕切っておられました。



今回の来日には二つの目的がありました。第一は高齢のお母さまのお見舞いで、第二は「日本と英国のコロナ感染症対策の比較研究」を行うというものでし

た。先生はすでにワクチンを接種されていましたが、来日後、2週間はホテルに缶詰めの状態で、この機会を利用して、リサーチアシスタントを雇用し、ZOOM会議を利用して多くのインタビューをこなされたそうです。帰国する前日、折角の機会なので、桜の花見に千鳥ヶ淵をご案内しました。“spectacular”と満開の桜にご満足いただけました。

(藤村健夫、Development Economics 1972年卒)

### 編集後記

コロナ禍の中でも今年の桜もきれいに咲きました！

コロナ禍の色々大変な中でのお願いにもかかわらず、快くご寄稿くださった皆様、大変感謝しています。

今回のニューズレターを担当しています加藤珠比です。サセックスの繋がりをより活発化できたらと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

何かございましたら、こちらのメールアドレス (tamahikato@gmail.com)までご連絡ください。